

人間の安全保障を考える

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

みなさんは、国際連合の一つの機関としてユネスコつまり「国際連合教育・科学・文化機構」があるのを御存知かと思います。日本にもその運動を支える「ユネスコ協会」が全国に 300 近くあります。民間企業でもユネスコ協会が設立できるということを知り、開倫塾でも「開倫ユネスコ協会」を昨年 12 月に設立しましたところ、本年 1 月に日本ユネスコ協会連盟から正式に認証され、「開倫ユネスコ旗」(大きな旗)の授与をされました。民間企業が母体となったユネスコ協会は、朝日生命と富士通に続き全国で第 3 番目だそうです。私が開倫ユネスコ協会の会長を務めさせて頂いております。

そこで、開倫ユネスコ協会では「心の中に平和のとりでを」というユネスコの基本的な理念(考え)のもとに、最近国際連合で提唱され、私たちも深く共鳴している「人間の安全保障」という考えに基づいて活動しようということになりました。そこで、本日の「開倫塾の時間の放送では、少し聴き慣れないかも知れませんが、「人間の安全保障」について皆様とご一緒に考えてみたいと思います。

2. 「人間の安全保障」とは

①「人間の安全保障」は英語のヒューマン・セキュリティ(Human Security)の日本語訳であります。

今までは「国際安全保障」という考えが、安全保障を考える際に主流を占めていました。国家つまり国としてどのように安全を保障するか、国家の安全を守るかという見地からものが考えられてきました。国の安全や自らの体制を守るために軍備を増強したり、核兵器を含む兵器を開発・配備すること、それによって力のバランスをとって平和を守ることを主眼に、冷戦時代は多くの国がエネルギーを使ってきたようです。ベルリンの壁の崩壊後、冷戦構造が終結し、平和で豊かな世界が世界中に出来上がると思ったら世界各地で宗教紛争や民族紛争が国をまたがって生じたり、一つの国内で起こったりしております。今でも毎日のように新聞やTV、ラジオでその模様が報道されております。

そこで出てきたどのように国家間の戦争ではなく民族や宗教間の特定の国の内外での紛争を解決したらよいのか、国連を中心とする国際社会は苦悩して、ようやくたどりついたのが、安全保障を考える際に大事なものは、「国家の安全保障」だけでなく、一人ひとりの人間に着目をした「人間の安全保障」であるという考えです。国際連合を中心にこの「人間の安全の保障」という考え方が提唱され、国連中心の外交を展開する日本も、いち早く「人間の安全保障」の考えに賛同しました。小渕元首相の時代から、強く日本国政府も「人間の安全保障」を、日本外交の基本の柱の一つに据えております。

「人間の安全保障」の奥底(基底)に流れる考えは、「人間の尊厳(そんげん)」つまりすべての人々を一人ひとりの人間として大切にするという考えです。すべての人々の人間的尊厳を保障するために「人間の安全保障」という考えがあるのだと思います。

②紛争には、大きく分けて三つの段階が考えられます。「紛争前」と「紛争中」と「紛争後」です。おのおのの段階ごとに、「人間の安全保障」の考えを中心において、人々にとって必要なことを、例えば、日本国が援助を考えるともしなければなりません。「紛争の前」でしたら、紛争が起こらないように貧困を撲滅するための「開発」を中心に物事を考えることが大事。「紛争中」でしたら、生存を維持するための「人道援助」が大事。「紛争後」でしたら、人間の安全保障を中心に据えた「復興」のための援助が大事であるという事になります。絶えず環境に配慮しながら長期的なビジョンの元に「持続可能な開発」が大切と思われます。

3. おわりに

人間の安全保障のために、制度や政策も大事ですが、人々の意識そのものに着目することも大事。多くの問題は、イデオロギー優先の政治や経済的利害を調整することだけでは解決できない「心の中」の問題、つまり、「感情」に根ざすものが多い。そこで「多様性を尊重すること」、「寛容の精神を育むこと」を重視する教育、つまり、「異文化教育」が大切かと思う。

このような意味での「人間の安全保障」の考えは、「国際安全保障」に対立する考えではなく、その国に住む一人ひとりの「国民の安全保障」という同じ目的のためのもう一つの視点かと思われます。